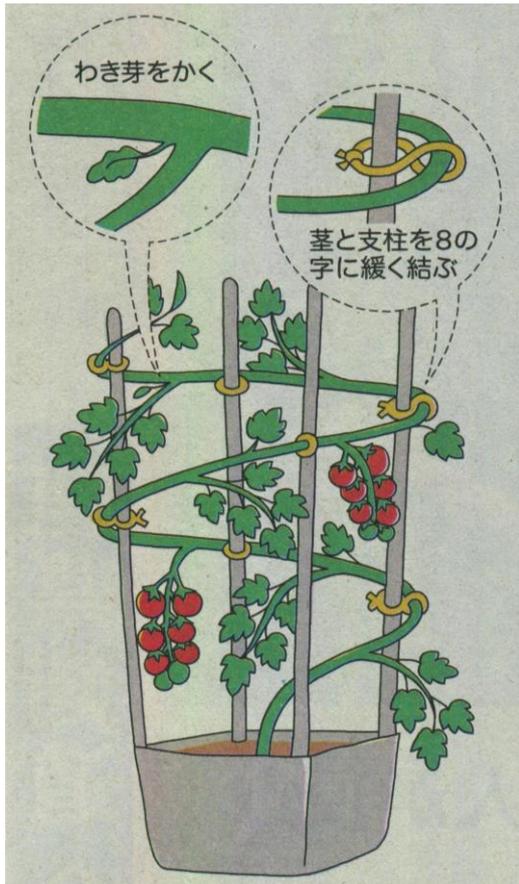


②ミニトマトを育てよう

様子見て摘果や追肥を

南アメリカ原産のトマトは、夏の代表的な野菜の一つで、ビタミン、ミネラルを多く含んだ栄養価の高い健康野菜としても知られています。トマトは連作に弱く、ナスやピーマンなど同じナス科の野菜を栽培した場所には向きませんが、新しい土が入ったプランターでの栽培であれば、前作や連作障害のことを考慮せずに栽培できます。トマトの中でも比較的育てやすいのはミニトマトで、プランターでも栽培できます。



【プランター・培養土】栽培期間が長いので、深型で大きめのものが良いでしょう。培養土は自分で配合する場合、赤玉土7割、腐葉土2割、バーミキュライト1割を混合して作りますが、市販の野菜用培養土を利用するのが手軽です。最近では、排水の良いトマト専用の培養土も市販されており、必要な肥料も配合されています。

【肥料】横幅50センチ×縦幅30センチ×深さ25センチのプランターであれば、堆肥450グラム、化成肥料15グラム、ヨウリン3グラム、苦土石灰30グラムを土とよく混合して使います。

【苗と植え付け】苗を購入するときは茎が丈夫で節間がつまり、葉につやがあって、耐病性のある品種の苗を選びます。本葉が7、8枚ぐらいで、第1花房の咲き始めたものが良いでしょう。苗を植える時は、深植えしないように植え付け、2センチ程度の支柱を4本立て、らせん状に誘引します。茎と支柱を8の字に緩めに結びましょう。

【わき芽かき】主枝の1本仕立てとし、茎や葉のつけ根から伸びてくるわき芽は、小さいうちに指先でかき取ります。わき芽をそのままにしておくと実つきが悪くなるので早めに摘み取ります。

【摘果】一つの花房に実が多く着きすぎた場合は、先端に着く奇形果や発育不良の実だけを取り除きます。

【追肥】1段目の実が大きくなり始めたら、2～3週間に1回くらいのペースで、液体肥料か固形肥料を、10グラム程度を施します。土の量やミニトマトの状態によって肥料の効き具合が違いますので、葉が少し黄色くなったり、肥料切れのサインが出たりしたら、追肥をして様子を見るようにします。また、かん水は控えめにします。

【病害虫】雨が多い時期は疫病が発生しやすいので、できるだけ雨よけをしましょう。またアブラムシの発生も見られますので、発生が少ないうちに防除したほうが良いです。

(鹿児島市都市農業センター)

平成29年5月11日(木) / 南日本新聞